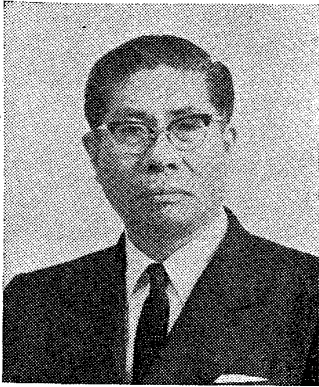

随 想

質的發展への一管見

大 中 都 四 郎*



わが国鉄鋼業が、その量において驚異的發展をなし遂げ得たのは事実である。それにもかかわらず、われわれの大先輩諸公が必ずしもこれを手放しに祝福しようとしなないのは一体何故であろうか。勿論それに続いた昨今の深刻な不況がお祝いムードを吹き飛ばしてしまつたせいもあるだろう。

それはさておき、そもそもこの驚異的發展を達成せしめ得た理由としては数多くの要因が考えられる。いわく、国家の経済政策。いわく、世界の市場条件。いわく、技術の革新、等々である。

今ここで技術的要因だけに限つてみると、何といてもLD転炉の功績が第一であろう。次いで鉄鉱石のペレタイジング、あるいは重油吹込、高圧操業による高炉の能率向上。さらにはホット、コールドのストリップミルの普及等々の要因が考えられる。

しかしながらわが国鉄鋼業にこの發展をもたらしたこれら技術的要因のどれを見ても導入料を支払つての輸入技術でないものはなく、まことに残念ながらわが国鉄鋼技術者みずからが生み出したものは何一つないのである。

われわれの大先輩はこのことに対して、随所随時に、口をそろえ、筆をそろえて、あるいは「學術技術の革新のとき至れり」と勉励され、あるいはまた「外国技術の吸収摂取のときは終つた」と叱咤しておられる。つまり祝福どころではないのである。

では一体どうすれば日本鉄鋼界みずからが革新技術を生み出し得るのであるだろうか。一体どうすれば質と量とを兼ねそなえて名実ともに世界鉄鋼界に覇を唱えることができるのであるだろうか。

私は私なりに考えてみた。結局「人」と「金」と「政治」とにつきるような気がする。

まず「人」であるが、今、日本鉄鋼協会の会員は10,000人になんなんとしていると聞く。もとよりその殆んどすべてが鉄鋼技術にたずさわる人々であるには相違あるまい。とするとその0.1%に当る10人の優れた研究者グループを結成することは何も困難なことではあるまい。ましてやその0.01%に当るたった一人の洞察力、指導力、統制力、政治力に富んだ指導者を選び出すことなどもつと容易なことであろう。いいかえればLD転炉の發明開発に匹敵するような革新技術を生み出すだけの「人」に関するポテンシャルはわが日本鉄鋼界は十分持つているといい得るのである。

次に「金」であるが、ここ一、二年の間に鉄鋼に関する研究に日本の官界業界が投資している金額は年間100億前後と推定されるが、その10%を重点的に投入することは決して困難なことではあるまい。年間10億を5年継続投資すれば50億の研究費が使えることになるが、あのLD転炉の研究開発に50億を使つたであろうか。

こう考えてくると、その気になりさえすれば「人」と「金」はいつでもできるということである。

ではこの「人」と「金」とをそろえてきて何をするのか。これに対しては既に多くのなさねばならぬ問題点が提出されている。その選択については選ばれた10人の人に委せればよいと思う。

* 本会理事 住友金属工業株式会社東京技術部長

ただここに考えておかねばならぬことが二つあるように思う。その一つは鋼とは鉄の酸化物を原料とせざるを得ないということである。もう一つは鉄鋼技術の発達史において画期的な貢献をもたらした技術とは、例えば、高炉、平炉、転炉、ストリップミルなどそれらがすべていわゆる製鉄プラントに直結したものであるということである。

最後に「政治」であるが、やはりここに問題のすべてがあるように思う。

もともと日本資本主義生産機構の各方面にわたるもろもろの弱点あるいは矛盾点は巧みに強化され、あるいは修正されて日本経済の繁栄に寄与していることは言を俟たぬところである。しかし、わが日本鉄鋼技術の開発または革新という分野においては一体何の強化あるいは修正がなされたのであろうか。その弱点あるいは矛盾点がむき出しになつたまま放置されているのが現状ではないのか。

この鉄鋼技術開発における資本主義経済の落し子のような無秩序と混迷とから何とかして脱け出そうと精進しているわが日本鉄鋼協会の努力こそはまことに敬服せざるを得ない。すなわち共同研究会における新技術開発部会、あるいは設備技術部会の創設など、それが酸化鉄の還元を狙い、あるいは製鉄プラントに直結しようと意図しているが故に一層有意義この上ないものと思うのである。否、私ごとき者がとやかかいう余地は、も早何も残つてはいないということを私自身がよく知つている。

しかしながら、その折角の活動意欲も卒直にいつて実は混迷の渦の中に巻き込まれ去る憂いなしとはい得ないのではなからうか。

この意味において、わが日本鉄鋼協会が今年3月に発表している「金属研究の将来計画について」の中に唱えているわが国鉄鋼技術開発行政に対する構想は最も時宜を得た、また最も具体性の高い考え方というべきであろう。この考え方がさきの弱点と矛盾とを補い、混迷から救い出すための必要最低限の方策であるとい得よう。しかし、それだけにその試みは急を要するものというべきである。

それにもかかわらず、この構想も結局意思表示にとどまつているのではなからうか。まことにわが国鉄鋼技術の開発に関する限り、「政治」は白紙の上に未だ何の筆跡も残そうとしていないのである。

1万人の会員。「鉄と鋼」誌、欧文誌の充実さ。講演大会の盛会さ。共同研究会各部会の参加者一同打つて一丸となつているあの独特のムード。標準化への精緻な努力。海外との交流。等々年間1億円を越える膨大な事業内容はわが日本鉄鋼協会の50年の歴史が一步一步、一石一石築き上げてきた実力と権威に外ならないものである。

いいかえればわが協会こそ今や百花爛漫をたたえる時を迎え得ているのである。

当然、わが協会に次に期待されることはこれら爛漫の花に見事な果実を結ばせることに外なるまい。すなわちわが日本鉄鋼協会を母体として次代の鉄鋼生産方式を決定するような革新技術を生み出し、わが国鉄鋼業がその質においても驚異的な発展をなし遂げることこそわれわれ協会人に与えられた課題であるとい得よう。

これを要するに、わが日本鉄鋼協会は既にその許された可能性の最大限度まで活動の範囲を拡張し、しかもその中に緻密な密度を充填し終り、見事な果実を实らせる寸前にありながらわが国技術行政の貧困からこれ以上の前進をはばまれていたというのが現状であるように思う。

ではどうすればよいのか。

いうまでもなく、政治的な一歩前進以外にはないはずである。「どのような」といつて、協会としての意思はさきの「金属研究の将来計画について」に既に決定されている。あらゆる努力を払つてもかくその実現に努力すべきだと思ふ。「誰がやる」といつて、協会みずからが先頭に立つて前進する以外に道はないのではないか。